

# 1. 高校時代、青春を謳歌、一浪を目指す



高校時代、特に3年生の時、この青春時代はきっと後から取り戻せないから遊ぼう！と決め一浪覚悟で**オートバイ**の免許を16歳で取り50cc→250cc→360cc→450ccと4台乗り継いだ。まだ**S●X**も知らなかったがオートバイの魅力はそれ以上だと感じ毎日バイクに乗っては快感を得ていた。

が後に**S●X**の快感には叶わないことを知る、当然か(笑) 国立大学を目指したが一浪しても不合格。滑り止めに受けたが行く気もない地元福岡の大学に母親が無理矢理入学金を納めたため嫌々行ったが性に合わず**45日で退学**。次の日から**ブリタニカ**という幼児向け英語教材を販売する外

資系企業に正社員で入社。**正社員**といっても成果報酬型コミッションセールスで**基本給0円**、交通費、食事代すべて持ち出した。25万円の商品を1つ売ると翌週に35,000円報酬が振り込まれる。やることは1日100軒の家をピンポンして、その日のアポを3つ取る。そして、夜お宅にお邪魔してプレゼンし、営業ではありませんと言いながら相手がどうしても欲しいという状況に持ち込んで契約を取り付ける、そんなぶっ飛んだセールス手法であった。1ヶ月はまったく売れなかったが2ヶ月目に

**月給30万円**の売り上げとなり**一気にトップセールス**となった。やり甲斐と一生もの

の自信を付けることができたが、制約時間が長過ぎる。朝起きて深夜に自宅に戻る生活。そういう禁欲生活をしていると、心の底から今すぐやりたい欲求が吹き出して来るのがわかった。夏だから海に行きたい、好きな音楽をもっと聴きたい、映画も見たい、彼女とデートもしたい(当時居なかったが)そこで閃いた。そうだ！それらすべてをやれるのが大学生活なんだ！！ここからエンジンが掛かり、二浪目の9月から宅浪開始。決して自宅から通えない東京の大学しかも経営工学しか受けないと決め中央と法政を受験。運良く2校とも合格することができた。当時法政には同級生の江川卓がいて法政に入れば神宮で

良い思いができることはわかっていたが、中大理工は山手線のど真ん中後樂園、**中大の方が総合大学**というのが決め手で中大に決めました。

## 2. 大学入学、自問自答の日々



(一番右が私)

1976 年(昭和 51 年)中大理工管理工学科に入学しました。下宿は葛飾区亀有公

園前 3 畳一間 6,300 円の部屋だった。どんなに狭くてもここには自由がある。正に自分にとっては

天国であった。この年の 4 月に少年ジャンプでこち亀の連載が始まり、下宿の大家さんはなん

と元亀有警察署の署長さんだった。当時の大学時代の生活はというと、朝 8 時に目が覚める。自分に聞く『何したい?』…まだ寝たい…『じゃあ寝れば!』…寝る。また 10 時に目が覚める。聞く『何したい?』…もう少し寝たい…『じゃあ寝れば!』寝る。12 時に目が覚める『何したい?』…もう寝るのはいい、腹減った…『じゃあ何か食べたら!』で食べに行く。亀有駅前にできた Mac でハンバーガーを初めて

食べた。こんな感じ常に自分に聞き、その答えで行動する。正に自問自答の日々。夕方になると

銭湯に行く。上がると目の前にある居酒屋でホッピーともつ煮込みの味を覚える。ほろ酔いで線路沿いにあるおでん屋の屋台で飲み直す。この屋台は深夜の 2 時 3 時までやってたから、暇な時は熱燗飲みながら、店主と朝まで語り合った。時間をいくらでも自由に使える青春時代は良いものだ。誰からも何からも

追い立てられるものはない。すべては自分の好きなように生活できる。やっぱり大学に入り直し

て正解だった。大学は週一の実験は 1 回でも欠席すると単位をもらえないのがわかったのもそこだ

けは頑張って早起きして出席をした。その時の出席番号順の仲間 6 人と仲良くなり、彼らのお陰で卒業できたようなものだ。夏は伊豆七島に冬はスキーに毎年 7 人で出かけた。秋にクラスでダンパをやろうと

付属上がりの学生が企画し私も参加することに。その時隣の学生が『どちらの大学ですか?』と

聞くから『そりゃあ中央だろう!』と言うと『学部は?』…そりゃあ理工だよ。…『学科は?』…おいおいここは管理工学科のダンパじゃないのか!と言ったら『お見かけしたことないもので』と言われるくらい大学には行っていなかった。やったのは家庭教師。一回 2 時間週 2 回で 2 万円。これを 3 件掛け持ち。どの家庭も夕食を出してくれたのが一番嬉しかった。平日週 6 日学校には行かないが、家庭教師先には行き、おいしいご飯を食べ、中にはお酒を出してくれる家庭の奥様とご主人が帰るまで飲む事もあった。



### 3. 座禅で開眼、理工ボート部入部を決意



そんな自由奔放自堕落な生活を一年もやっていると流石に飽きたというか、なんだかつまらなくなってきた。そこで前から興味のあった座禅をすることに。調べると鎌倉の円覚寺が有名らしい。早速横須賀線に乗り北鎌倉で降りたら直ぐ目の前に円覚寺はあった。そこに大きな看板が！『学生大摂心』とある。学生向けの2泊3日の座禅会らしい。即申し込み当日に。3月初めの鎌倉は恐ろしいほど寒い。外は氷が張っていた。その座禅会にはルールがあり『しゃべるな！』と入口に書いてある。起床4時、まずは道場内を10分歩く、そして座禅・・・朝食・・・座禅・・・講話・・・座禅・・・座禅・・・座禅。とにかく会話なしの環境で座禅を1日中やり自分と向き合い続ける修行。泊まり掛けの座禅は思った以上に辛い。寒さ、不安、恐怖の中、恥ずかしながら心の中で『母ちゃーん』と叫んでいる自分が居た。戦時下で死ぬ前に兵隊が『母ちゃーん』と叫んで死んでいくそんな心境が分かる気がした。15人の学生が向い合い4列。計60人。外気温0度の中、座禅修行中窓は全開。雲水が警策を持ち、我々が座禅している中、ゆっくり歩き精神がたるんできていると思われる目のおじぎをされる。すると観念してこちら合掌、首を垂れる。思いっきり両肩に4発ずつ計8発警策で叩かれる。あまりの痛さに男子学生でも鳴き声を漏らす者もいた。私は寒さで体がガタガタ震えているのに雲水は私を叩かない。その状況がどうしても納得いかず自分から合掌、目の前の雲水に首を垂れた。すると8発叩かれるのだが、死ぬほど痛かった。しかし体は温まり震えも無くなった。最後に参加者全員が自己紹介をする場があった。この中に「早稲田大学理工漕艇部角田と申します。今回は合宿を抜け出してきました！」という人がいた。理工漕艇部？ 初めて聞く単語であった！ この経験を通し、完全にメンタルにスイッチが入り、もうぼやぼやしている場合ではない。何か思いっきり打ち込めるものが欲しくなった。



## 4. 関東理工系レガッタ新人ナックル出場



座禅体験で、もうボヤボヤ生きてる場合ではない。何か思いっきり打ち込めるものが欲しかった。それが何かはわからなかったが、2 年になり学校に行くと、中庭にオールを立て新入部員勧誘をしている軍団が。これが理工ボート部との出会い。当時サークルではなく**体育連盟**に所属していたのは、理工ボート部だけだった。ノートに名前を書くと戸田の合宿所に連れて行かれ、入部することに。クラスの仲間に声を掛け一緒に 2 年生は 2 人で入部。あと 1 年生が 10 人くらいいたと思う。

5 月の GW に**関東理工系レガッタ**があり、中大理工からは**新人ナックル 3 杯**で出場。私のクルーは、あと 100m の所でバウが腹切して、そのままドボンとコースの中に落ちてしまった。怪我はしなかったが、その彼はその後退部してしまった。名前は内藤(前会長ではない)という名前だった。





## 5. 同期が全員退部、主務そして主将へ



2年生で入部した当時4年生は引退しており、3年生が2名、2年が私とあと2人、1年生が10名。秋の相模湖レガッタが終わり冬を超え新学期が始る頃1年生の部員もグッと少なくなった。結局4年生2名、3年生私一人、2年生は10人→4人となった。そこで新入部員を勧誘すべく入ったのが、17期となる下遠野、橋本、山口である。

**当時の練習** 私自身は座禅体験以来、何か自分を追い込んで追及するものを求めている気がする。自分に対するマゾ的な思考である。試合前以外ボートを漕げる環境がなかったが、陸トレは好きだったので理工校舎近くの公園で週3回率先してやっていた。先輩から「岡崎が主務をやれ！」ということで2年生の秋から主務、マネージャーとして年末の納会の準備に入った。



右 17期橋本(2011年死去)とのツーショット

### 納会1977

13期深堀主将合わせて4名の追い出しコンパである。実家から学ランを取り寄せ、ボタンを中大のボタンに変え、納会当日、現役部員は全員学ランで参加であった。先輩OBは1～12期まで。今と比べると小規模だが会の雰囲気はピリッとした緊張感があり、締まっていた。当時のOB会長は8期北島さん。OB現役合わせて25名程度。会場選びは好きで都内5,000円/人で探した。当時赤坂に、こまどり姉妹が経営する店があり、そこでもやった。



## 6. 中大理工ボート部初のエイトで全日本出場



第56回全日本、第5回全日本大学、第9回全日本女子、第18回オックスフォード  
選手権競漕大会 昭和53年8月25日 27日 於 戸田オリンピックコース



私がマネージャーをやっていた3年生の夏、どうしてもエイトに乗りたくて、就活、卒業研究で多忙な土木の4年生2人(14期末廣さん、蓮井さん)を口説き落とし、エイトを組むことに。まずメンバー集め。当時部員数12名、ギリギリである。艇は中大艇庫の一番奥にひっそり置かれていた『はやぶさ』。これは1964年東京オリンピックに日本選手団が乗ったエイトらしい。そんな由緒正しい艇を借りることになったのですが、とにかく重くて大きい。座ると左右が余りブカブカ状態。当時の日本選手の平均体重は80キロ台後半らしい。ナックルエイトなんて揶揄されていた。全日本選手権試合前1週間にとんでもない事件が起きた。午後練で荒川を漕いでいる時に、誤って船底が杭に触れ一瞬で沈んだのだ。7番14期蓮井さんの『飛び込めー！』の一声で全員が船を蹴飛ばし、岸まで必死に泳いだ。命は助かったが艇がなくなり練習ができなくなった。そこで早稲田理工に事情を話し艇を借りることができた。その名は「回天」名が勇ましい。人間魚雷である。名の通り艇が回転するのには参った。キャッチで船頭は右側に船尾は左側にねじれるツワモノであった。その有難い艇で本番に挑み、成績は全日本選手権23位。出場艇数は敢えて記さない。その実績を就活のエントリーシートに書き込んだことは言うまでもない。誇りである。約50日の合宿を朝4時起きで頑張った記憶と経験は二度とできないので先輩や仲間に感謝です。

## 7. 4 年春、最後の理工戦に懸けてベストメンバーで臨む



4 年の春、最後の関東理工戦レガッタで過去最高の成績を上げるべくフォアでベストクルーを選んだ。試合の 2 ヶ月前の 3/3 合宿所入り。60 日間の猛特訓を計画。

### 【想定外の出来事その 1】

昨秋に自主練メニューを渡し、合宿初日テスト。その中で明らかに自主練していないメンバーが 2 人いた。14 期山中と 15 期山口である。すぐさま『あれほど言っておいたのに前達は練習して来なかったなー！ 5Kg のプレート持ってコース一周走ってこい！』と一喝！ それから残りのメンバーで練習、夕飯の時間になっても 2 人とも帰って来ない。『おいどうした！』コックス宮崎が見に行ってくれた。すると山口が右足を痛めたとの事で足を引きずって帰ってきた。もう空は真っ暗だ。『山中は？』どうもお腹が痛くなったとかでウンチしてたらしい。これで 2 人戦線離脱。2 人は 60 日間自主練&飯炊き要員となった。当時私の考えは、選手の中で、体が大きく、力が強く、漕ぐのが上手い 4 人を選びフォアを組むことだった。

### 【想定外の出来事その 2】

あと試合まで 5 日となった朝練の後の反省会で事件は起きた。バウ下遠野と 3 番 I くんが漕ぎ方に関して大喧嘩となり、あわや取っ組み合いとなった。その場を制し暴力は辞めさせたが 2 人の気持ちはどうも治らない。その後、午後練をする時間になった時、I くんがいないことに気づいた。え～まさか。『岡崎さん、I くん荷物ありません』試合まであと 5 日。他のメンバーではとても代わりはできない。メンバー一同この状況に凍りつく。岡崎さん、どうします？『I の首に縄を巻いてでも連れ帰る！』そう言い放ち、出かける準備をしていたら山中が『これ持っていってください！』と荒縄を綺麗に巻いて手渡してくれた。これには一同大笑いだ。『下遠野行くぞ』と 2 人で出掛けたが、I くん住所も電話番号もわからない。手掛かりは「お父さんが海上保安庁の船長で横浜近くの宿舎に住んでいる」ということだった。まず関内駅まで行き、腹が減ったので吉野家の牛丼を食べる。店を出たところで歩いている人に聞いてみた『この辺に海上保安庁の宿舎ありませんか？』『さー？ 知りません』知りませんか？ 知りません。知りませんか？ 知りません。何人かに聞いていたら『あの辺じゃないかしら』という人がいて、行ってみた。するとあったあった、集合住宅の中に I くん苗字が書いたポストが。それからピンポンし本人が居なかったがお母さんに事情を話して待たせてもらった。この時のお母さんが粹だった。ジョニ黒とグラス 2 個出してくれて労を労ってくれた。小 1 時間経った頃 I くんが戻り何とか合宿所に戻るよう懇願。翌日戻る確約を得てその日は帰った。さあ次の日から練習を再開したが、会話は少なくともノリが良いとは言えなかった。3 日後試合に出たが、バランスも悪くタイムも伸びなかった。これが私のボート生活、最後の結果である。



## 8. 理工ボート部で学んだこと



最後の試合で結果を出せず、大失敗をした私ですが、ここで得たものはとてもとても大きかった。その後社会人となり起業し**チームビルディング**する際そのまま役立った。ボートというものは1人や2人パワーのある者がいても艇は早く進まない。それよりも8割のパワーでもいいので、クルー全員が同じ思考の下、協調し合った漕ぎ方ができる方が労力は少なく、速く、長い時間艇を進めることができる。これは会社経営も同じで、1人のスーパースターが居る会社よりも、同じマインド、同じ理念で動く社員がいた方が業績は伸びる。ボート生活最後に**私はリーダーとして大失敗**をしたわけですが、この経験があったからこそ、その後起業し会社経営する際とても生かされました。では具体的にどう生かされたかについては、**続編『社会人編』**をご覧ください。